表情表出による情動調整が会話に対する印象に及ぼす影響

○野口素子¹・吉川左紀子²

(¹ 京都大学大学院教育学研究科・² 京都大学こころの未来研究センター)

キーワード：情動調整，表情表出，印象評定

The effect of regulating emotional expression on the others' impressions of the conversation

Motoko NOGUCHI¹ and Sakiko YOSHIKAWA^{2, #}

(¹ Graduate School of Education, Kyoto Univ., ² Kokoro Research Center, Kyoto Univ.)

Key Words: emotion regulation, emotional expression, impression rating

目 的

表情表出による情動調整の方略として，表出抑制と表出誇張の2つが挙げられる。表出抑制とは，何らかの情動を経験したときに表情による情動表出を抑えること，表出誇張とは，情動表出を大げさにすることである (Kunzmann et al., 2005)。

野口・吉川 (2011) では，初対面の2者の会話において，一方 (実験協力者) が表情表出を抑制あるいは誇張することで，受け手の表情表出も変化することが示された。本研究では，会話全体の印象について表情表出による情動調整の影響がみられるのか検討するため，野口・吉川 (2011) の研究で収録した会話の音声情報および会話テキストに対して，第3者が印象評定を行った。受け手の表情表出だけでなく，2者の会話の音声やテキストにどのような違いがみられるのか比較検討した。表情抑制や表情誇張が会話内容に影響するならば，音声とテキストいずれの印象においても抑制条件と誇張条件に差異がみられるだろう。情動調整が会話内容ではなく，発話音声の抑揚やトーンなどに影響するならば，音声情報に対する印象においてのみ両条件間に差異がみられるだろう。

方 法

実験参加者 大学生・大学院生 24 名 (男女 12 名ずつ，平均 21.7 歳，SD = 2.8) が参加した。

会話刺激 野口・吉川 (2011) における各組の会話から抜粋した音声およびテキスト刺激を用いた。野口・吉川 (2011) では，初対面の2者のうち実験協力者である一方が表出抑制あるいは表出誇張をしながら自由にディスカッションを行った。抑制条件，誇張条件各 12 組の会話について，以下の要領で2つずつ抜粋し，計 48 刺激を用意した。

各組約 10 分の会話のうち，1 分台前後 (前半) と 8 分台前後 (後半) からそれぞれ1つずつ，ある程度まとまりのあるパラグラフになるよう抜粋した。音声刺激とテキスト刺激は，それぞれ全く同じ会話箇所から用意した。会話時間やテキストの文字数は，調整方略の条件間で差がないよう出来る範囲でそろえた。

印象評定項目 福島ら (2008) を参考に，8 項目の形容詞対 (温かい-冷たい，親しみやすい-親みにくい，感じの良い-感じの悪い，積極的な-消極的な，意欲的な-無気力な，わかりやすい-わかりにくい，主観的な-客観的な，感情的な-理性的な) を選定した。それぞれ1～5の5段階で評定を行った。

手続き 個別実験により行った。参加者は，音声条件かテキスト条件のどちらか一方に割り振られた。どちらの条件においても，PC を使って1つずつ呈示された会話に対して，形容詞対による印象評定を繰り返した。刺激の呈示順はカウンターバランスされた。

結 果

印象評定項目について因子分析 (最尤法，プロマックス回転) を行った結果，3 因子が抽出された (説明率 62.59%)。第1因子 (「親しみやすい」「感じの良い」「温かい」「わかり

Table 1. 各因子の項目平均評定値およびSD

	音 声		テ キ ス ト	
	表出抑制	表出誇張	表出抑制	表出誇張
親和性	2.94 (0.80)	3.46 (0.79) *	3.06 (0.78)	3.16 (0.76)
	2.96 (0.73)	3.66 (0.76) *	3.14 (0.70)	3.47 (0.79) *
積極性	2.96 (0.90)	3.40 (0.87) *	3.07 (1.04)	3.25 (0.82)
	2.94 (0.90)	3.59 (0.90) *	3.28 (0.87)	3.28 (0.89)
主観性	2.84 (0.95)	3.32 (0.97) *	3.25 (0.98)	3.30 (1.00)
	2.84 (0.96)	3.53 (0.98) *	3.26 (1.00)	3.46 (0.96)

上段は会話の前半，下段は後半の評定値を示す。カッコ内はSDを示す。
*抑制条件と誇張条件における差が有意であることを示す。

やすい) を「親和性」，第2因子 (「意欲的な」「積極的な) を「積極性」，第3因子 (「感情的な」「主観的な) を「主観性」と命名した。各項目評定値について，

各因子の項目平均値について，2 (刺激：音声/テキスト) × 2 (方略：抑制/誇張) × 2 (時間：前半/後半) の分散分析を行った。その結果，「親和性」では，刺激と方略の交互作用が有意であった ($F(1, 286) = 16.06, p < .001$)。下位検定の結果，音声，テキスト両条件において，誇張条件の方が抑制条件よりも有意に高く評定された ($F(1, 286) = 77.04, 9.67, ps < .005$)。「積極性」では，刺激と方略と時間の交互作用が有意であった ($F(1, 286) = 4.44, p < .05$)。音声条件において前半，後半ともに，誇張条件の方が抑制条件よりも有意に高く評定された ($F(1, 572) = 17.67, 38.91, ps < .001$)。「主観性」では，刺激と方略の交互作用が有意であった ($F(1, 286) = 16.85, p < .001$)。音声条件において，誇張条件の方が抑制条件よりも有意に高く評定された ($F(1, 286) = 54.51, p < .001$)。

考 察

以上の結果より，表出抑制が行われた会話は内容がより理論的で客観的，表出誇張が行われた会話はより親和的で積極的な印象を与えることが示された。友人と話すなど相手に親しみを伝えたいときは表出誇張，仕事など情報を客観的に伝える必要があるときは表出抑制というように，会話の状況や動機に応じて表出抑制と表出誇張を使い分けことが有用であると考えられる。また，「親和性」における差異は音声，テキストともにみられたが，「主観性」・「積極性」では音声にのみ差異がみられた。表情表出による情動調整の影響は会話内容にもみられたが，音声にはより多くの差異が含まれることが示された。今後は，頻出単語や音声の抑揚，トーンなど，どの側面に差異がみられるのかテキストおよび音声情報の詳細な分析をすることが求められる。また，情動調整が直接受け手の発話に影響したのか，調整者の発話内容や音声の変化が受け手の発話に影響したのかを明らかにする必要がある。

引用文献

- 福島ら (2008). 目白大学心理学研究, 4, 75-84.
Kunzmann et al. (2005). *Psychology and Aging*, 20, 144-158.
野口・吉川 (2011). 日本心理学会第75回大会発表論文集, 936.